

『伊勢音頭恋寝刃』

解説

本作は寛政八年（一七九六）七月大坂角芝居で初演されたもので、同年五月伊勢古市の遊廓で起きた殺傷事件を直後に脚色した作品である。その事件とは、遊廓「油屋」において伊勢の医者・孫福齋が遊女おこんを巡って阿波の藍玉商人と争い、九人を殺害の後に自害したというもの。医者が御師に変えられているが、内容はそのまま劇化の骨格となっている。因みに御師とは参宮の世話、観光案内などをした下級神官のことで、伊勢では「おんし」と読む。作者は江戸時代中・後期に上方劇壇で活躍した近松徳三。わずか数日で書き上げた所謂「一夜漬け狂言」である。初演の配役は福岡貢=二代目中山文七、お紺=初代芳沢いろは、であった。

物語は御曹司が放蕩の末に紛失した重宝を、忠臣が艱難辛苦して探索するという御家騒動物の典型。上方歌舞伎に以前からある世話狂言の趣向取りが顕著だが、各幕に、相の山のお杉お玉・二見ヶ浦の日の出・夫婦岩・太々神楽・伊勢音頭……等、伊勢の風俗が巧みに描写され、庶民の憧れであった〈お伊勢さん〉の名所案内を見る趣が狂言の鮮度を保っている。

現行の歌舞伎公演では、阿波蜂須賀家の銘刀〈青江下坂〉を巡って伊勢の御師福岡貢が廓に入り込み、馴染みの遊女お紺からの偽の縁切りを真に受けて激高のうえ「十人斬り」に至る「油屋」「奥庭」の単独上演が多いが、国立劇場では平成二十七年に、当月と同じ中村梅玉主演によって五十三年ぶりの通し上演が行われた。今回は「太々講」の上演はないが、物語の発端「相の山」からの上演により、敵味方争う中での銘刀とその折紙（鑑定書）の行方が明らかになる。

貢の役は、場によって二枚目・つっころばし・辛抱立役と見る者を楽しませる役柄の変化があり、江戸期の三代目坂東彦三郎の名演以来、粹で形優位な江戸系と和事味の勝る上方系それぞれの型が伝承されている。最大の見せ場はやはり、刀を扱うことが本来でない御師の貢が、因縁ある妖刀に魅入られて次々と人を手にかけていく「十人斬り」で、清涼感溢れる夏衣裳が血に染まっていく様式美で舞台が彩られる。

あらすじ

・序幕 伊勢街道相の山の場

阿波国を治める蜂須賀家では、当主の叔父である大学が国横領を企み、御家騒動が生じようとしていた。家老の今田九郎右衛門が忠義心をもって必死に君主を守っているが、御家堅持のために將軍家に献上する伝家の宝刀〈青江下坂〉が紛失中である。

その宝刀詮議のため、九郎右衛門の息子万次郎は父の命を受け伊勢に在った。しかしあろうことか廓遊びを覚え、だらしなく放蕩の日々を続けている。今日も相の山節が聞こえる街道を杉山大蔵と桑原丈四郎を従え、馴染み女郎のお岸たちと伊勢参宮の趣向で遊山を楽しんでいる。これよりは通い慣れた古市廓の油屋にと心を浮かせる万次郎を、従う奴の林平が諫めた。伯父にあたる伊勢御師を差配する藤浪左膳から、宝刀詮議の首尾を問う書状が届いていたのであった。林平が問い糾せば、万次郎は宝刀を一旦手に入れはしたものの、呆れたことに遊蕩代に窮し銅脈の金兵衛という町人に質入れをしてしまったのだという。そして困ったことには、金兵衛は直後に出奔して行方知れず。本物だと証す折紙だけは手にあるものの刀を探す当てもなく、今や父と叔父に顔向け出来ない情けなさである。為す術のない万次郎の前に、その青江下坂を売買しようという御師と侍が突然現れた。しかしこれは真っ赤な偽物。万次郎がうっかり折紙を出して真偽を質すと、侍は巧みに万次郎が持つ折紙を偽物とすり替えてしまった。この侍こそ謀反人大学に一味する阿波の藍商人・藍玉屋北六で、初手から折紙を奪う計略であった。そして万次郎に従っていた大蔵と丈四郎も実は大学一味。何も知らずに去って行く万次郎の後ろ姿に、悪者らは嘲りの笑いを浴びせるのであった。

・妙見町宿屋の場

妙見町の旅籠山田屋には、懦弱な万次郎の身を預かる藤浪左膳が逗留していた。ここにやはり伊勢の御師で左膳に仕える福岡貢が来た。貢は左膳の指示で面会した家老九郎右衛門からの口上を伝える。青江下坂を取り戻せない万次郎を勘当し、左膳自ら刀の詮議に当たって欲しいとのことであった。左膳にとって九郎右衛門は義理の兄、そして貢の実家も元は今田家に仕えた家柄であった。今田家と縁深い貢に左膳は密事を依頼する。……万次郎を見放すこともまた庇護することもできない中、万次郎を匿い青江下坂を詮議してくれと。他ならぬ師の頼みに、約束を違えぬ証しの金丁で応諾する貢。左膳は貢を見込んで万次郎に引き合わせる。

この宿には大蔵と丈四郎が同宿していた。二人は大学からの密書を徳島岩次という侍に届けようと示し合わせていた。大学はその岩次を使って万次郎に罪を拵え、目障りな九郎右衛門を蟄居に追い込もうとしているらしい。これを陰からこっそり窺っていた林平が見咎めると、驚いた二人は慌てて逃げ出し、林平もそのあとを追い駆けて行く。

一方、貢はひとまず万次郎を二見村の知る辺に預け置こうと、宿を出立するのであった。

・野道追駆けの場 野原地蔵前の場

大蔵と丈四郎を野道まで追ってきた林平。二人から密書を奪おうとして揉み合いになり、既に書状は二枚に破れている。必死で逃げる大蔵は井戸

の中に、丈四郎は地蔵になりすまして林平をやり過ごそうとするが、林平がこれを見つけ、さらに追っ駆け模様が続く。

・二見ヶ浦の場

まだ夜明前の七つ半。二見浦に忍ぶ貢と万次郎の前に、互いに手紙の片端を奪おうとする大蔵と林平が馳せ寄った。これに万次郎を襲おうとする丈四郎も加わり、皆で手紙を奪い合う。遂に手紙は貢の手に入るが、暗闇で手紙の名宛が判然としない。その時夫婦岩にかかる注連縄の向こうに見事なご来光が昇り、手紙を照らす。貢は「読めた」とその名宛てを知り、大学一味の計略の一端が明らかになるのであった。

・大詰 古市油屋店先の場

暑気払いで大層な賑わいを見せる古市名うての遊廓油屋。遊女や仲居の夏衣裳が涼やかである。貢はこの店抱えのお紺と深く馴染んでいる。その貢を頼って万次郎が忍んで来たが生憎と折り合えず、人目についてはいけないと、女郎のお岸が万次郎を一先ず送り出す。

ここにようやく青江下坂を手に入れた貢が、万次郎に一刻も早く刀を渡そうと馳せて来た。万次郎とは入れ違いになってしまったが、後は奪われた折紙の詮議が必要。どうやらこの廓に居続けをしている阿波大尽こそ、折紙を所持している徳島岩次である様子。仲間の藍玉屋北六と一緒に居るところに直ぐにでも踏み込みたいが、側聞する人相と全く違っている不思議さ。二人はそれぞれ明日にでもお紺とお岸を身請けして阿波に出立するというが、どうにかして大学に折紙が渡るのを避けなくてはならない。

この貢を意地悪く邪魔立てする仲居が居た。岩次らと通じる万野である。わざと貢を馴染みのお紺に会わせず、さらに腰にある青江下坂に目を付けて、廓の定だから自分に預けると無理難題を言う。貢が困り果てていると、油屋で働く料理人喜助が「私がお預かり申しましょう」と俠気を見せて、助け船に現れた。喜助は親がかつて貢の実家に仕えていた事実を密かに打ち明け、主筋に当たる貢への忠義を誓う。貢は頼もしい助力者を信用し、今預けるこの刀こそ真実の青江下坂だと耳打ちする。この内緒話しを阿波大尽に身をやつした徳島岩次が盗み聞きしていた。岩次はしめしめと刀の中身を入れ替えたが、その悪巧みを喜助がしっかり覗き見していた。

貢の座敷には、万野の差し金により、お紺の代わり妓として不器量なお鹿がついた。かねてより貢に心底惚れているお鹿は、これまでの手紙の遣り取りの段々を述べて恋心を掻きくどき、貢に否定されると「金まで貸した」と恨み言を言う。元より貢の知らぬ借錢。これは全て、貢を陥れる万野の奸計であった。座敷に現れた岩次や北六に「女郎を騙して金取った」と愚弄されると、貢は真実を明らかにしようと激昂して「万野呼べ」と叫んだ。しかし呼ばれて出て来た万野は反って貢のお鹿への不実を次々と言いつつ立てる。貢は太々しく居直る万野の態度を見てさらに立腹するが、遊蕩

の場では仲居相手に手も出せない。満座で恥をかかされた貢は怒りに震えながら、「身不肖ながらも……」と懸命に潔白を言い立てる。しかしついには恋を誓ったお紺にまで不実を詰られて愛想尽かしをされ、満座で面目を失う。この場に居たたまれなくなった貢は、喜助が差し出す刀を乱暴に引ったくると、お紺を恨み、悔しさに身を震わせて店を去って行った。片や岩次と北六は憎い貢を店から追い出して満足顔。実は二人は悪巧みのために正体を隠し、敢えて岩次は北六に、北六は岩次に入れ替わっていたのである。北六は首尾良くお紺を身請けできると上機嫌になり、心を許してうっかり折紙をお紺に渡してしまう。実はお紺の愛想尽かしは、愛する貢を想う故の偽の縁切りだったのである。

万野が青江下坂を手に入れたと、したり顔で現れた。先ほど、貢が店を去る時に喜助が岩次の刀の方を渡したのを見ていたのである。しかし刀身を入れ替えてしまっていた岩次が狼狽えた。貢が持って行った刀身が本物の青江下坂で、今ここにあるのは鞘こそ本物だが、中身は岩次の刀身であった。慌てた万野は刀を取り戻そうと、貢に通じる喜助を制して駆け出して行った。

華やかに当地名物の伊勢音頭が踊られる中、鞘だけを見て「刀が違う」と貢が慌てて戻ってきた。しかし喜助の機転で、貢が持っている刀こそ正真の青江下坂。それと知らない貢が争ううちに万野を刀で軽く叩くと、鞘が容易く割れて鋭い本身が万野を傷つけてしまう。凄まじい銘刀の切れ味。廻りで囃される音頭をよそに、「人殺し」と騒がれて逆上した貢は、妖刀に魅入られたように北六、岩次、お鹿……と、次々と手に掛けるのであった。

・同 奥庭の場

多くの人を殺め、返り血を浴びた貢が乱心の体で庭に現れる。貢の身を案じるお紺の励ましによりようやく正気を取り戻した貢は、自らの罪の重さにこの場で切腹しようとする。しかしこの場に喜助が現れ、今自分が手にしている刀こそ真の青江下坂であることを知る。喜助の忠義により宝刀が、そしてお紺の働きにより折紙が手に戻った。貢はめでたく揃った二品を万次郎に渡そうと、本国帰参を急ぐのであった。

(鈴木英一)